

榮

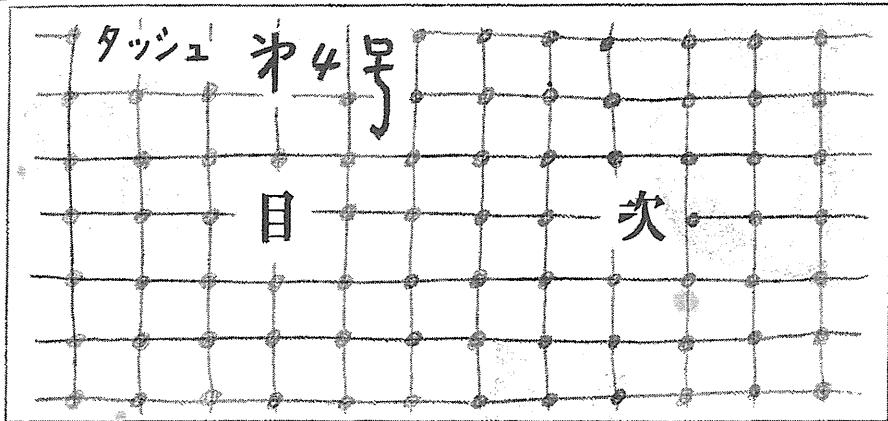
光

蹴

球

部

7期~12期



部長より	東郷 覚
アジア大会に学ぶ	八期生
中学校夏季県大会	塩谷晋作
県下地区別リーグ戦	新井洗二
我在わすれて	小沢進
関東大会県予選	林
国体県予選	沢
肉体前後の感想	茂
合宿日誌	東
學習院大学蹴球部に入つて	郷
親善試合	谷
台無し (題なし) 十和田行	晋
病氣の恐しさ	作
六期生送別会	覚
昭和三二一三三年成績表	
図書室で	
編集	

45 45 43 41 39 34 32 29 22 19 16 14 13 10

5 2 1

部長より

東

郷

寛

「何日にできますか」「十五日にできます」「あ、そうですか、大丈夫ですね」「え、」
「」ういう会話が何かを注文したとき店頭で繰り返される。でもその日になつて喜び勇んで来てみると「奥はこれこれでまだ出来ていません」といわれて、次々引上げることが誰の経験にあることだろう。「んなことなら、もつと前に言ってくれ、ぱい」と帰りの道は喜びが全く憤りに変つてしまふ。

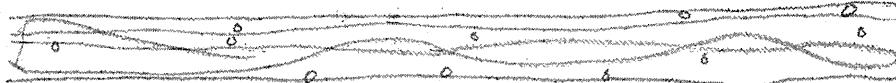
一学期の末の関東大会の予選は折角いとここまで行つたのに試験前のために最後の一試合の出場が許されなかつた。さぞ皆残念だつたと思う。私も同感である。だがわれわれは長い目をもつて前方を見なければならぬ。学校は日頃、部生活の大切なことを強調し

「何日にできますか」「十五日にできます」「あ、そうですか、大丈夫ですね」「え、」
「」ういう会話が何かを注文したとき店頭で繰り返される。でもその日になつて喜び勇んで来てみると「奥はこれこれでまだ出来ていません」といわれて、次々引上げることが誰の経験にあることだろう。「んなことなら、もつと前に言ってくれ、ぱい」と帰りの道は喜びが全く憤りに変つてしまふ。

高校時代のあの部生活は本当に有意義であつたと幾年か経つて誰しもが思えるよう決して無理なことをさせたくない。現代のわが国の教育制度、スポーツ界の状態は混沌として見極め難いものがある。恐らく今後も「んな」とが度々起ることと思う。われわれはこの流れを上手に渡らなければならぬ。どうか学校という水先案内人を信頼してもらいたい。どうか先生方の意のあ

るところを汲み、意気沮喪することなく、このシーズンにも最善を尽してももらいたい。(終)

ている。学校から部がなくなつてしまつたらどんなに味気ないことだろう。しかし同時に学校生活



アジア大会に学ぶ

八期生 塙 谷 晋 作

第三回アジア競技大会が東京に於て開かれている五月三十一日（ 土 ）に運良く国立競技場に於て行なはれるサッカー準決勝戦の入場券を入手したので、又と無いチャンスだと思って、思い切つて途中で学校をエスケープして観戦して来た。以下は大会の模様と学ぶべき事を思うまゝに書きならべて見た。

× × ×

二時ちょっと前に競技場のスタンドに腰を落ちつけ場内を見渡すと真赤なアンツィーカーに緑の芝と真白いラインがきれいに調和して何とも言えない大会雰囲気がただよっている。スタンドは六、七分の入りぐらい。太陽は真夏にも似ていりくと容赦なく輝く。坐つて居るだけで大部まるい。

試合は第一試合、中国（台湾）

対インドネシア。二時インドネシアキック・オフで開始された。選手導は連戦の疲れと暑さが目立つて元気が無い。しかしパス、ワークに優る国府に對し体力とキック力によつて対抗するインドネシアとの戦いは一進一退の白熱戦となり両軍しばしばゴールを脅かすが、得点に至らず前半戦を終了。後半に入つても状勢は交らず国府やゝ優勢。インドネシアも右ワインダから攻撃をしかけるが夷らず。26分国府左のウイング・インナーのコノビからレフのセンター・リンクをじり絶妙のヘッデンクでゴールを陥れられた。後守備に専念するインドネシアも再三のチャンスを迎えるがFWの決定力不足でものにならずに遂に1-0を持って国府の決勝進出が

ます驚くべき事は、彼等の体力である。真に炎天下に九十分も走り回り、蹴り、アタックし、スライディングし得る体内は不斷無休の練習の成果であろう。その真黒な太い手足は實に良くこれを証明している。技術の面ではすべて学ぶべき事ばかりであるが、特にパス及びヘッド、これを強張したい。

パスは全く正確そのもので、かならずフリーの選手が居るということも見逃がせない。トライアングルは特に目立つて多く、インナーとウイングに限らずすべてのパスの基礎となっている。横パスが出来たらがならず次には縦にパスが地面をはつてているといった具合に。パスにともなう事であるが、トラップの確定性が目立つた。トランプしたボールを完全に自分の物と

して次のボール、コントロールを容易にしている。トラップしたと同じ時に飛込まれてボールを取られる様な例は試合中見られなかつた。ヘッド、足以外に使用する所といつたら頭である、彼等は實に良く頭を使つてボールを回している。内部の方はどうだか）FBのヘッドによるピンチ脱出。FWのパスは全く正確そのもので、かならずセンターリング等々。ヘッドショットも完璧である。

最後にコンビであるが、両軍共に完全とは言えずに個人技に頼る傾向がいく分見えた。しかしパス、ワークもフット、ワークも一種の完璧された物として見るべきであった。

第二試合。韓国対インド戦。

本大会オニ位シードの韓国は實に好調なスタートを見せた。それに

時に飛込まれてボールを取られる時、常に足並を乱し攻撃に於ても肝心な所でつまずいていた。六分で韓国優勢の内、FBの真中でついたパスをCF良く拾つて独走、左スルミへ流して先取点を得る。

後半に入るやインドは得意の足わざと細いパス、ワークによつて韓国のバックラインを乱し23分遅に同ヘッドによるトライアングルパス。点にこぎつけたが、やはり韓国の攻撃力に一日の長有り、30分台上に入つてへばつたインドバック陣をドリブルで巧みに縫つたCFのシート、RIの鋭い突込みで二点を加え試合を決めた。しかし最後まで試合をすてず、セイビングするインドのGKの健斗は印象に残つた。

この試合では、韓国の強引な、スケールを大きい攻撃に対しても反してインドは常に細いパス、ワークに足並を乱し攻撃に於ても肝心な所でつまずいていた。六分で韓国優勢の内、FBの真中でついたパスをCF良く拾つて独走、左スルミへ流して先取点を得る。

後半に入るやインドは得意の足わざと細いパス、ワークによつて韓国のバックラインを乱し23分遅に同ヘッドによるトライアングルパス。点にこぎつけたが、やはり韓国の攻撃力に一日の長有り、30分台上に入つてへばつたインドバック陣をドリブルで巧みに縫つたCFのシート、RIの鋭い突込みで二点を加え試合を決めた。しかし最後まで試合をすてず、セイビングするインドのGKの健斗は印象に残つた。

い足さばきによるショートパスで攻めるイングランドとの対称的な試合であった。韓国は両ワインタは余り使はずC・Fから強引に相手バッタ・ラインの真中を破って行く戦法が成功していた。特に縦バスが非常に有利に使用されていたのが目立つ。前半こそ乱れたが後半になつて取り戻したイングランドの細い足技によるボール・コントロールは実に見張らせる物がある。

試合中不思議に思つた事は、イングランド選手よりも、ずっと韓国の選手の方が大きい事であつた。しかし後半にこの暑さにもめげずに盛り返した体力はさすが南国のイングランドの選手だなあと思つた。

以上の二試合の結果、国府と韓国とがオーニ回大会に続いて決勝でまみえる事になつたのである。

二試合を通じて特に感じた事は四チーム共に正々堂々たる試合態度で最後まで健斗を続けたことであった。そして彼等の精神が立派にアジア大会の裏意に通じていた事を「」に記して、筆いや万年筆を置く」とにする。

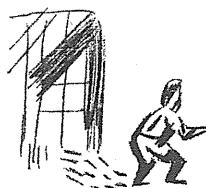
一九五八年六月一日

ヘ附記「この様な国際試合を観戦するという事は非常に有意義な事であり、又自分にとつても良い体験となり、進んだ技術を持つチームを見て、前進の一歩となすべし」と思ふ。であるから、今後もこの様な大会には、金とひまに相談してなるべく出かけよう。

いつもおとなしい××君、中学の関東学院との試合応援に夢中になつて、「オオマエ、あんな事しちゃだめだなあ」と言つた。そばで観戦していた姫の子とその弟らしい子が試合をおわつてから、「おにいちやん、もう帰るわよ」と言つていた。言われた人は大前君。テレながら「ウーン」と例の調子で答えるそれを見ていた××君「あれが大前の妹か、まさい！」と赤面。蹴球部に珍らしきツラの皮の薄い人間である。

中学校夏季県大会

新井洗二
林 茂進
小沢



第一回戦

対千代中

栄光	2	0 - 0
2 - 1		0
		千代

土曜日、授業が終つてから例の所でみんなして弁当を食べそれから部室へ行き、ストッキンタ、ユ

ニホームをもらい、一時十分頃佐

々木さんにつれられて学校を出発

した。みんなかばんにボストンバッグを持っていたが小沢だけはか

ばんを工藤に持たせてしまつた。三人組（小沢、新井、小林）の一

人である小林がついてきた。田浦

から大船まで行きそこで東海道線に乗り換えた。その電車のこみようたら、京浜急行なんて問題で

四時キックオフは千代中がとり、栄光は風上をとった。千代中はさすがに強豪らしく栄光の攻げき

なく、いくら押してもものれない。そのうちみんなのってドアーナシたか、ぱくらを見送っていた。佐藤、宮杉、大石たちがのれなかつたか、ぱくらを見送っていた。

ようやく片中に着いたら、千代中の選手はもう練習していた。ぼくたちはいそいで着かえ、ブランドへ出た。

ここでメンバーを発表。

太石 大町 田林 新井 富野 小沢 宮杉 村佐 松田
G K R B L B R H C H L H R W I F C I C L

学光は片中の人に人気があるらしく、拍手してむかえてくれた。特に十一番松田は人一倍人気があつた。

を防いでいた。しかし栄光は終始相手のゴール近くで試合をし、なんとかして先取点を入れようとしたが初めての公式戦のため、あがつたのかそれとも相手のバックが強かつたのか点をあげることが出まなかつた。前半戦は終つた。

後半栄光は前半点を入れることができ出まなかつたのでみんなで声をだしなんとかして点を入れようとした。ついに栄光は、ゴール前での混戦のとき、ボールがちょっと外へこぼれてきたのをR.W.小沢つ、「こんで一点を上げた。これでみんなちよつとおちつきをみせてきて、こんどはC.H.市村のコーナーディックをJ.I.佐藤ヘッドで決め合計二点を上げた。一方千代中は最初の一点で「カツクン」ときたらしく全然声がなくなり、試合をすべてたようになつてしまい、栄

光はそのまま押し切り、ホー回戦に勝つた。

あとで若えてみればもつと点がはいつたようだが前半無得点にされれて二点に終つてしまつた。

なにしろホー回戦に勝つたのでみんなうれしくなり六時ごろ片中を出て家路についた。〔新井記〕

第二回戦

対浦島中（六月十五日）

栄光 3
0 —
——
0 浦島

この一点で栄光の全試合無失点の夢破れてしまった。だが二点のアヘッドに落ち着いてスレーをしそくに逃げ切つた。この試合で勝因となつたのは最初の一点である。これにより栄光が勝てるなという心のゆとりができたのではないだろ

栄光キックオフ直後、松田のパスを受けた佐藤が決めて一点を取つた。それから十分頃、市村が宮杉のシュートをつづいて一点。また前半終了寸前に小沢のセンターリンクを市村が決めて一点と、前半早くも三対零とした。一方浦島は攻撃に移ろうとしても一人で持つて行こうとするのでバックにすぐつぶされてしまつた。しかし後半になりC.H.がドリブルで栄光のバックスを抜き一点を入れた。

うか。しかし、結果は準勝ではなかつた。その心のゆとりを敵のC Fにつかれ、一点を許してしまつた。

それから最後まで声を掛け励まして、全力を尽して戦つたことである。

〔新井記〕

(準決勝)

対市場中(六月二十三日)

栄光 2
1 - 0 1 市場

今日は片瀬のグラウンドからこちら、県営グラウンドに移つた。今ほく善はF WとBに分れて練習をしている。そのすぐそばでは一中と城山の準決勝が行われてゐる。ぼくはそちらに気をとられて

練習がだれて、加藤さんから「F Wしつかり練習やれ！」と声がかかる、すると囲りにいたBのウゾウゾウがまねして同じ事を云う。相手の市場はぼく善から少し離れた所で濃いグリーンのユニフォームを着て練習している。応援には東郷先生はじめ、高一の方々や同級の野球部の人達、その他さまざまの人間。

さて、一中が三対一で城山を敗つた後、すぐ試合が行われた。前半、ぼく達F Wはすぐ敵ゴール前にせまり、J I佐藤のパスをG F市村がかすめ、R I宮杉が失敗して、ライトへ転々とする。へといつてもゴールから五メートルのところに位置にあるのに気がつかず、ついにおしい先取点をのがした。でもずっとせめ続けたかいあってC F市村がショートしたのを、敵のバックスがものの見事に入れた。まったくぼく善には幸運な一点点だつた。その後二十分頃一点返されたが、前半は押し続けたまゝ終つた。しかしハーフタイムの時

の皆んなの顔はブランドの土が整いので蹴つたり、アタックしたりするとすぐほこりがたち、それと汗とでいやはや見られたもんじゃなかつた。

又、ぼく自身ものどと口の中がへんにおかしかつた。きつと音んなうだつたに違ひない。

後半、ほこりと相手と戦いぬいたが、ちぐはぐな攻畠でこちらの

ゴールもたまたまピンチに陥る。

しかし、ついに実力の差は出た。

十五分頃、J.I佐藤からの縦パ

スをCF市村はどうだらけの足でけつた。すぐ彼はたおれた。これ

は別にすかした訳ではない。その

瞬間ネットがゆれたからだ。ぼく

ら一人はもうほこりとの戦いで、半分おかしくなつていただけほんとうに疲しかつた。この後半

で目立つたことは、西松田のチャンスメーク一ぶりが十二分に發揮された事だ。敵バックをすいすい

された所はこつちのウイングがとねいた所はこつちのウイングが

ひがむくらいだがら。又バックではハーフの林がいつもながらのフ

ァイトで顔をどろだらけにして僅斗した事は、この勝利に見逃せない存在だつた。

II小沢II

(決勝戦)

対 藤沢 中

栄光
0 - 1
1 - 2 中

この日の県営サッカー場は完全に死んでいた。数十日の日照り続

きに、ブランドの水分は完全に失われ、かさかさになつた土が十セ

ンチ程積つていて、歩くだけでもほこりがまい上る始末であつた。

その土とは対照的に栄光と一中の決勝戦が始つたのだ。

前半、栄光がキックオフをとつて始めたうちにはまあまあ五分五分であった。ところが時間がたつにつれ、栄光は一中のペースに巻き込まれて行きボールは栄光ゴール

の前をうろついた。そのうち下Bの手痛い悪質チャージに、ゴール前二、三米の直接フリーキックをとられたが、これをよく押えた。

しかし、そのほつとした気持ちつかの間、十五分頃右からのコナー・キックをするすると左に回わされ、ついに敵し工に右隅にシュー

ートされた。しかし、みんな快調であつたので、1点などすぐ返す自信が充分であり、落着いていた

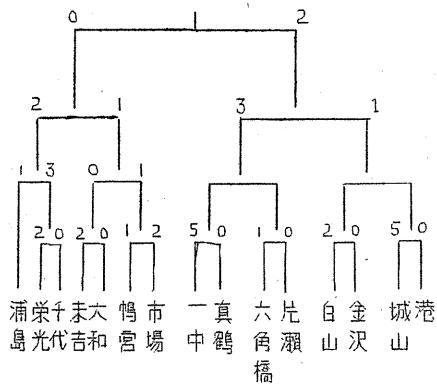
そして 1-0 のまま前半を終了し

後半、1点をめぐつて、崇光イレブンは猛烈にファイトを燃やして、一中におそいかかつた。しかし、一中のバックスの壁はいつの間にか、後に数十本のつつかえ棒をしたかのように堅く、どうしても破ることが出来なかつた。そして、やつと得たペナルティーもどうしたことか決らず、同点のチャンスをのがし、一方その後相手のバックスのキック力を利用した速攻に会い、だめ押し点を許した。ちょうど後半二十分頃であつた。

その後も崇光イレブン、猛進団をやつたが、ついに一中のバックスの壁を破ることができなかつた。まさに完敗であつた。しかし、ぼくたちとしては、この試合は大

会中一番奥力を發揮でき、また一番氣持のよい試合であつた。敗因としては、まずキック力の差がありすぎたことだ。一中などは、ぐつと押されいても、バツクの一蹴りで一気に形成逆転という場面を幾度も見せつけてくれた。それには比べ栄光のバツクスは、あまりにもおさまつすぎたような感じだった。」それで栄光は対一中、三重敗を喫したわけである。』小沢』

夏委中学選手权戦



県下地区別リーグ戦

第一回戦 対 藤沢高

(五月三日)

東光	4	
2	1	0
0	藤沢高	

三十三年度最初の試合とあって
昨年とはだいぶ違ったメンバーで
一回戦を行つた。

「前半」前半十分までは、両軍得
点なく、たんたんと試合は進んだ
が、十四分頃、東光チャンスをつ
かみ、加藤から大泉へパス、大泉
独走してショート、ゴール、イン
して東光まず一点を挙げる。その
後も、度々チャンスをつかんだが
、拙攻でつぶす。しかし前半終り

近く、ペナルティ・キックを得、
佐伯慎重にコーナをねらつたが、
返るのを大泉が決めた。

「後半」始め、五分五分であつた
が、中盤で球を得、まず東郷、塙
ス、加藤ハーフながらも、ずっと
ドリブルで持つて行き、ショート
、「これがきれいに決り、3-0と
なる。3-0と離したが、バックス
も良くしまり、相手にチャンスす
ら与えない。そのうち、東郷球を
得、バックスを一人二人と抜き、
ショート、これを相手キーパーが
はじくのを、塙谷ショートし、「
これがゴール・インする。その後も
よく攻めたが、入らず4-0で
終る。

この試合は、本年度最初の試合
とあって、気分一新、皆ファイト
を出し、なかなか見ごたえのある

試合であった。

第二回戦 対相洋戦

(五月五日)

栄光 2
0 - 2
2 - 0
2 相洋

快晴であったが、栄光対相洋戦の頃より曇り初める。前にやっていた試合は何か非常にのんきな気がする。

二時キックオフ。立上りよりあまりせめられず、これは勝てるなと思っていたら、五分R.I.にノーマークのショートをされ、必死に反戻するが、どうもうまく行かず前半終了。

後半はダッシュが出て、前半の試合とは見違るほどの意気込み……さつそうとして、ただちに生駒五分ショートして一点をばん回。いよいよ敵を攻する。

R.I.生駒球を取つて、R.I.東郷が走る後方よりバツクス二人の間へパス。東郷強引に二人をぬく。ショートなる。さあしめたと思うともううれしくてたまらない。まもなく笛が鳴つて試合終了。ワードは特に一東郷、生駒のコントラビンビは素晴らしい。三角パスが小

束だ。フォワードのコンビ、フオワードヒーラーのコンビが非常に悪い。「とにかくバスは、見ないでるのでまつたく通らない。技術からいって、相洋に劣るとは思えない。が、ファイトとダッシュが無い。そのうち二十分又R.I.ノーマークの二本目のショートをされ、必死に反戻するが、どうもうまく行かず前半終了。

逐にコーナー。これが最後のチャンスだ。これで入れるよ、と思うがこれはショート出来ない。ああまた相洋に負けるかと思うと気が気がしない。これこそ最後だ。R.I.生駒球を取つて、R.I.東郷が走る後方よりバツクス二人の間へパス。東郷強引に二人をぬく。ショートなる。さあしめたと思うともううれしくてたまらない。まもなく笛が鳴つて試合終了。危い処だった。この試合を通じて、

ファイトさえ出せば、もっと良く戦えると思った。東郷一生駒のコントラビンビは素晴らしい。

かつた。

対 鎌 学 戦

(五月十八日)

栄光	0	0	0
	0	—	0
	0	—	1 鎌学

(後半) 栄光は対等にゲームを進めていたが、十八分敵 RW が独走を終る。

栄光	0	0	0
	0	—	0
	0	—	0 県鎌

この試合の前より鎌学が遠征をし、刈谷だの藤枝だのという名内と戦って好成績をおさめているといふ噂を藤原の先生から聞いていたので、試合前の練習は、意欲があふれ、非常に身が入っていた。

グラウンドのコンディションも上々である。

「B 内山と C H 佐伯がアタックするも、栄光ゴール右隅を破られてしまつた。後半は少し油断したのかかもしれない、もう一本敵 CF にショートされたが、CH のオフサイドで救われた。

二十分頃、CF 大泉が目にボールをあてて退場。SH 加藤在フォワードに繰り上げる事件もあって始末である。その県鎌は八人であった。新メンバーを組んで初の試合でコンビがまだ出来ていない事は確かだが、二点や三點はそれはずである。敗因はみんなが「県鎌は力モイ」と油断した事である。

もう一步の奥込みが足らず、相手のゴールキックとしておしいチャンスを失う。その後相方共チャンスらしいチャンスも見当らず前半

全く衰れな次第である。あんなにおして点が入らない事があるだろうか。前半などは攻められたのが一度ハーフラインを越したのが三、四回であった。ウインクが絶好のセンターリングを上げてもみな敵のキーパーに捕らえてしまう始末である。その県鎌は八人であった。新メンバーを組んで初の試合でコンビがまだ出来ていない事は確かだが、二点や三點はそれはずである。敗因はみんなが「県

第三回戦 対 県立鎌倉高校

(五月二十五日)

もう少し慎重に前半だけでも前のメンバーでやり、点が入つたら新メンバーに代えるなりしていたらこんな事にはならなかつたであろう。半分以上が新しいポジションなのでなれど中途半端なプレーが多くた。フォワードは一般にトルツフが悪く、又敵が前にいなくてドリブルで持つて行けば軽くぬけるのに、わざわざ変なパスが正確でないし、ハーフとしての効きをほとんどしていなかつた。又全体にもっとファイトをださなくてはだめだ。今日は試合だというのにこないのがいたがタイマンである。こんなことではだめだ。必ずみんなくるようによろしく。コレカラゼモオングハイ、ファイトをだして頑張ろう。

〔内山正樹〕

		第1回戦	(栄光)	4-0-3-2
GK	林 美山 原伯	(藤田 代泉 井谷)	G I K P F C K G	
RB	宇佐 内石 佐加	(東郷 生駒)		
LB				
RH				
CH				
LH				
RW				
RI				
CF				
LI				
LW				

或る練習日。練習を終つての帰り路で、高一の〇〇君、自分の帽子を誰かがまちがえたとみえて、自分のでないのを持って来て、「クマさん、それ俺の帽子じゃな?」「違うと」「あれ? それじや宇佐一美さー!」「ちがうよ」誰に聞いても違う。今度は高一に聞く。「ねえ、だれか帽子まちがえていない?」皆自分のかぶっているのを見る。該当者はいないうらしい。「それじや僕のは誰のだらう。あつぼくのだ」

我在わすれて

関 東 大 会 県 予 選

対 県 鎌 田 煙
吉田島 山井一夫

第一回戦 対 県 鎌
崇光 6 3-1 0 ○ 県 鎌

神奈川県制覇と、三年連続大会出場を目指す崇光の意気はものすごい、又そのコンディションも、本金士と三日つづいた練習のせいか絶好である。

今日もやけつくような炎熱の日がじりじりと照りつけるにもかかわらず、そのクランドコンディションは、ほこりもたたず絶好であった。試合前軽い練習を行つた。又例のようにキヤヌテン加藤がトス

二時三十分、崇光のキックオフで試合が開始された。崇光ハーフ陣の活躍によつて、早くも敵ゴール前に倒し再三チャンスをつくるが、結局フォワードの突込み不足で中々入らない。

しかし八分、自称百万弗コンビ右側のRW東郷、R工生駒から、ボールがゴール前にまわされ、「W塩谷ヘッドで、ボールを前に落しながらの素晴らしい突込みによつて

ハーフ陣は積極的に攻撃に参加、SH飯田もハーフとしての初出場ながら健斗よく長蹴を行つていた。バックスは奥は堅実な守備をみせ、徹底的に相手の攻撃を封じていた。その後崇光FW調子よく、見事なパスワークで敵をおびやかし、R工生駒の活躍によりゴールを襲い、十五分頃二点目を県鎌のゴールにたたき込んだ。この頃より県鎌元気なくなり、全くの崇光の独壇場となつた。更に二十三分RW東郷とのコンビによりR工生駒又もや県鎌のゴールネットをゆるがした。

後半かさにかかるで攻めつけた。崇光は、十分、十五分と得点をかね。更に二十分RW東郷からの

ロンタパスを受けた加藤、大泉の
つっこみにより、六点目を記録、
完勝を飾った。後半は加藤、貞傷
により、メンバーがかけたが再度
出場迄、ハーフを繰り上げ戦うと
いう落着いた試合ぶりであつた。
唯、惜むらくは、FIFAの決定的要
入みが欠け、入る点が入らなかつ
たことである。

第二回 吉田島戦

不戰敗

第二回 吉田島戦

不戦敗

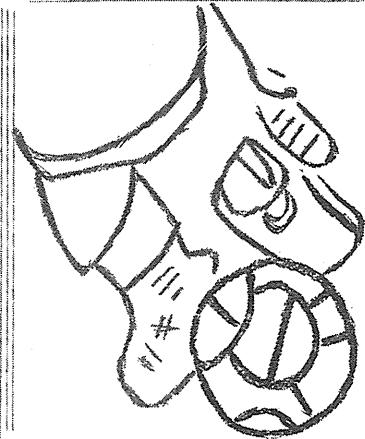
六月二十八日土曜、学期末試験の一週間前である。考えればずいぶん早いものだ、これが我々の大目標ともしていた関東大会進出を拒んだのである。この試合日程の通知があまりにもおし迫つていた。例えこの土曜の試合に勝つても日曜の試合は学校で許可しない、と云う事は今日の試合をやつてもむだとも看えられ、部長の手まわしもあつて相手チームやレフエリーや電話してしまつたのだ。しかしよく考えて見るとこの試合に勝てばベスト四で、県の出場チークにしもあるらすである。そこであわてて事務館に飛込み電話をかけ

た、まずY校へ連絡したが思ひがけない返事で、今日の相手と思つたY校は負けて吉田島だつたのだ。この時は救われた思いだった、が後が悪かつた、鎌倉のレフエリーにはなかなか通じない、いろいろしながら一時間も待つたがだめ、そのまま出発した。何となく不運な面持で長い坂を早足で上る。鎌学の試合が始つたところだ、次に目に入ったのが学帽をかぶつた一群だつた。吉田島である。もう後の祭だつた、レフエリーカラーライトの不戦敗を聞き、いくらたのんでも受け入れなかつた。あとで何だからだと言つてもこっちのミスなのだからしかたがない。又協会の不手際でもあつたのだ。今後このような失敗を繰返さぬよう注意したいものである。

た、まずY校へ連絡したが思いがけない返事で、今日の相手と思つたY校は負けて吉田島だつたのだ。この時は救われた思いだつた、が後が悪かつた、鎌倉のレフエリーにはなかなか通じない、いらいらしながら一時間も待つにがだめ、そのまま出発した。何となく不運な面持で長い坂を早足で上る。鎌学の試合が始つたところだ、次に目に入ったのが学帽をかぶつた一群だつた。吉田島である。もう後の祭だつた、レフエリーから衆だからんだと言つてもこつちのミス光の不戦敗を聞き、いくらたのんなのだからしかたがない。又協会の不手際でもあつたのだ。今後このような失敗を繰返さぬよう注意したいものである。

GK	林	(県 録)	T	タ ル
PF	宇佐美	0	G	I
	佐々木	0	P	K
	原伯	9	F	C
	田	0	C	K
	郷	9	G	K
	駒	9		
	泉			
	大			

G K. 林 美木原伯田鄉躬泉藤谷
P F 宇佐々石佐飯更生大加塙



体 県 予 選

第一回戦 対多摩高戦
於湘南閣

榮光 8 — 2 — 0
6 — 0 — 多摩

田代記

今日八月二十三日の暑い爭、汗を小きふきタランドへ行つた。タランドには相手の多摩高がもう来ていていた。半そでのシャツに横しま模様の入つている夾つたというより、かわいいユニホームで、それに皆小さいので、これなら勝てると思つた。それにしても今日の暑さは大変なもので、試合前の練習で、早くもクロッキーの感。その時加藤キヤブテンが「相手だつて同じく熱いんだぜ。」なるほどと思つた。

「前半」トスに勝つて、凡上から攻めて行つた。やはり榮光は押し

てはいたが、李謫子でなく、攻めなやんでいた。敵陣でばかりボルを動かしているのが、フォワード最後の決手が悪く、両三のチヤンスをつぶしていた。やつと二十分頃、センタースリーで持つて行つたボールを大泉がショートしそれが敵の体に当つてはね返つてきたのを、つかさず、又大泉が続けてショートしそれがきれいに決まって先取点を取る。その後しばらくして、今度は加藤がゴロで決めて二点目を入れる。すぐハーフ・タイムとなる。しかしあれだけ押していく二点では少い。トクさんの話では五つは完全に入れられたものだつたとの事。

「後半」後半は、まったく榮光のペースで、攻めに攻めた。始まつて向もなく、加藤一人で敵バック

スをぬきそれを。○
きめ、又大泉はペナルティライア
たりからのみごとな、ショート
トが決り、相手の奪起する所を早
くもくい止めてしまつた。その後
、大泉が連續三点を入れて、早く
も計七点をリードする。その頃か
ら一時栄光も攻められたが、敵の
凡ミスで救われ、ゴールを与えた
かった。しかしこの時のバックス
はコンビがまづく、ズルズルとゴ
ール前まで持つて行かれたりした
。終り近く加藤が最後の得点を加
え、8-10の大勝だつた。

第二回戦対茅ヶ崎

八月二十六日(於湘南)

栄光	—	0	—	0
1	—	0	—	茅ヶ崎

試合開始前十五分にやつと田畠

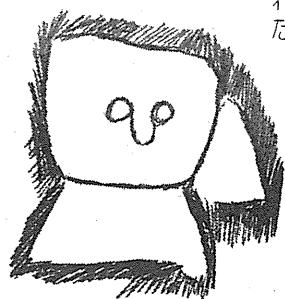
が現われ、大泉に至つては、三分
前にタクシーで乗りつける始末
だった。全くヒヤヒヤさせる。こ
れからは絶対におくれないでもら
いたいものだ。

試合開始後しばらくの間押され
たが、すぐに栄光のペースとなり
再三敵ゴールに迫る。しかし最後
のよせが弱く、得点には結びつか
ず0-10のまゝ前半を終る。

後半に入り茅ヶ崎は猛烈なファ
イトでおしてきたが、栄光これによくかわし五分チャンスをつかんだ。
まずRW菅沢からCF大泉に

もつかのま今度は栄光ハーフ陣の
乱れや、ロン・タキックの不足から
押し続けた。この向キー・パートの
飛びだしで、がら空きになつたゴ
ールをねらわれたり、ミスキック
をつけ込まれたりして全く危なが
つたが、ついていたのが一点も取
られずにタイムアップとなつた。
全く、勝を拾つたと云う感じだつ
た。

反省会では、キック力の不足、
サイドハーフのマークのあいまい
な事、フォワードの位置等が指摘
された。



第三回戦 対丫校(田畠也)

(八月三十七日於県営々)

栄光 0-5 7 丫校

「この日は台風のえいきようか、朝から時々激しい雨の降るいやな日であった。

今日はGKの林が私用の為出場できず、大前がGKだった。」のGKの欠場が全員の気持ち暗くさせ、ファイトをなくし、大きな不運をもたらせ、今日の大敗を招いた一因とも言えるのではないだろうか。

後半、栄光猛烈なファイトをだして反撲に移り六分四分で押しまくるが、FWの無駄なパス多く得点には到らない。この間に敵の連攻の逆襲にあり、更に二点加点される。一点も取れずに終るのではないかと危がまれたが、タイムアッシュとタッシュに押され、早くもピッチを招きフリーになつたインナーからの縦パスで、敵CFよりショートを放たれた。そして准球で

足だち、コンビが乱れ、押しまくられ、次々と得点を許す。守りを固め反撲に移るため、石原がCHへ大泉がSHへ下がる。栄光一点も挙げることができず、前半5-1で終る。

試合後の反省会に於て、バックのキツクの悪さ、FWのパスの無駄、又直接の敗因はダッシュとファイトの欠如であることなどを語あつた。又泉頭さんより次の様な事を指摘された。

今日敗れたに直接でかつ最大の原因は、LW塙谷、CH佐伯、GK林の欠場で、精神的及び技術的な大きな負担となつた。これからは全員が本気になつて「何故サッカーをやるか」「何故試合に勝とうとするか」と云う事を考へないといふにもならない。そして勝とうと何にもならない。そして勝とうといふ氣迫のない事が、多くの欠場者をだす原因にもなつてゐる。

国体前後の感想

泉頭篤二

八、十七。山から帰って一日休養。高校の練習の事が気になる。皆に会いたい。

グランandiseに出たが暑い上に足が動かぬ。変な所に肉が附いたらしい。サツカーレは登山のトレインニングになるが、その逆は成りたたぬ。欠席多し。旅行者と中学生指導だという。指導が終ったのだから練習に出なくていいという理屈には根拠がない。口に出したいが、こんな事ぐらい自分から理解できぬものか?

八、二十。遂にサボッタ連中頗る出さず。最後の練習日にしては全く不完全。コンビどころか、気迫の一矢も見出せず。それでもスコーチマンか、然し既に条件は与えられている。残った連中がやれど、その逆は成りたたぬ。実際は、明日の事を考えて不安だ

を励ます。「自信を持てよ」といふ。」「俺達をびっくりさせてくれるかどうか怪しいと考えていたら、」「俺達をびっくりさせてほしい。索性俺の方が強気だ。」「8-10で勝ったからといつて切に思う。然し自己達の力で、」「8-10で勝ったからといつて自分から立ちあがってくれるのは、」
一つの事だろう。僕が何か云わぬはりほめてやらねば。

八、二十四、1-0 幸勝。後半の方に緊張した。ピンチのきっかけを考へる。ちょっととした水漏りが竊んでもない洪水をもたらした。危く皆溺れる所だった。ツイテやがる。明日も一チヨウ、ヒツタクツテやりたいものだ。

八、二十五、バイトを早めに切りあげて、スッとんで県営へ。「聖園」危の坂道を、一人でとぼくと登る。GKは来てるだろうか。来てるに違いない。しかし、見ない事には心配だ。

クリーンとオレンヂが動いている。始まっているな。あ！GKは黒ズボン一 大前だ。仕方ない！。バックス乱れる。危いなと思つたらポコポコ点が入った。選手の顔を見る。ポーツとして突立ったま

まの大前。一かわいそうに一お前のは居ないんだ。

後半の押し気味の栄光を見て、鎌学の松沢先生が何点入りましたかと聞く。「六点です。」理解し兼ねた。

ねたうしくどちらが勝っているかと念を押す。「Y校です。」どうしてそんなに入れられたかと同様してくれる。言おうか。しかしはずかしい事だ！選手がサボッタなんてと云うのはー。」「チーム、ワーケがとれてないんです。」こうなつては、一点でも返すのを望むだけです。」一点でもいい。後半元気よく攻め込む、その姿は気持ち良い。しかし報いられるか。

くる。ニコニコ顔。後半はいゝ試合をした。いゝ試合ができた事。待望の一点を入た事。それが嬉しかった。思わず拍手。しかし、手を叩くと自然にあわれみの気持が入る。走り去つてゆく後姿に一抹のさびしさが漂う。

次の鎌学の試合ぶりを見る。すごい。近頃又、昔の名門が肩を並べる様になつた。五年も前には、僕等は此善をどうしても打ち破れなかつた。そして、今、栄光はY校にさえも大差で負けたのだ。周期がめぐつて来たのか。否、そんな宿命じみたものは有りやせぬ。変化は激しい。不斷の努力。創立から六年の年月が経つた。それも普通の平凡な六年ではなかつたのだ。決して創立の日の点迄下る事

は有得ないのだ。然し、僕は運動
軽で走りまわった草分時代に、鎌
学だとか、小田原だとかのチーム
を、驚きと敬意の眼差しで見入つ
たのと殆んど同じ気持で、彼善の
余裕のある試合運びを見つめたの
だ。

食堂のテーブルを借りて反省会
。各自の最大の弱点を検討する。
重苦しい気分だ。負けたからでは
ない。技術的欠点がいつまでも直
らないからではない。部員の情熱
、気魄の欠如が、もはや慢性化し
てしまつたのではないかという不
安、少數のしつかりした考え方を持
つた部員も、意氣のない、個人の
殻にとじこもつた部員を押える事
が出来なくなつてしまつたのでは
ないかといふ不安、これがいつま
でもつきまとつからだ。確かに危

機だ。下駄の鼻緒が切れたのでゆ

つくり歩いていると、「皆興奮して
早足になつてしまふ」と云つて、
数人が僕の来るのを待つて歩調を
合わしてくれる。「興奮」という
言葉が妙に気になる。僕の言つた
事に「興奮」したのだつたら、嬉

しい。皆と歩いていると重苦しい
氣分が段々晴れてくる。坂道の清
が、折からの大雨で増水し、勢よ
く流れている。

オニのしまうま、が
かぶりつく

ホーのしまうま、が
ボオルを吐き出す

煙のように流れる

しまうまの一
群
ボオルに化けて

ま
不味そうに

ボオルを吐き出すしまうま
美味そうに
ボオルを呑みこむしまうま

ゴオルの磁石が吸いつける
明るい鉄片が
空気の中を流动する

日記

迄、6日間、高校生、部長及び、幾人か---◇
であったが、一日目より、例年の如く、辛---◇
をふりかえってみた。-----◇



七月二十三日(水)一日目

今日は合宿の第一日目。台風のため練習はなし。朝は雨風が強かつたので、予定時刻に来た者はほとんど居なかつた。

飯田と山田がミットを取り合いしているうちにふとんむしにされる。晩飯が少し足りなかつたので、明朝ははらがへるだろう。(滝李)
合宿は普通は練習で始まるのであるが、今年のそれは度のおかげで、余興から始まつちあつた。しかし、久しぶりの猛烈雨で何かさっぱりした様な気持だ。キティ台風以来の強さだそうで、アカシア、ユーカリがだいぶ痛めつけられて可哀そう。

この猛台風が合宿の序曲だった

とすれば、これはまた何というすばらしい出発だろう。今迄の高校の成績はどうみても立派とは言えぬ。まだ、何等の活動をもしていないと云える。しかし、台風が、円覚寺の大杉の太い枝を、無慈悲にも、20Mの高さから地上へたきつけたように、諸君も自分達の根本的でない、ごまかしのもの、いい加減なものを、ことごとくふり落そう。そうして太い幹だけになろう。また新しく出発しよう。そして、この合宿が終り、そして今年の残った試合に於いて、立派な成績を残してみよう。いや、立派な成績というよりも悔のない試合を試そう。諸君のこれから努力が単に、〇〇大会優勝という単なる記憶の片切れに終ることなく、一生自分達の身につくものを

合宿



◇--今年も又、7月23日より、28日
◇--の先輩が参加して行われた。台風
◇--いが、しかし、愉快な、日々の記録

得るためのものである事をより重
大視する。そこでなかつたら、何
にも、まずい飯を食つて、暑いさ
中を走りまわる必要は全くなくな
つてしまふからだ。とにかく、「
の盤台風の序曲のしれづに劣ら
ぬ堂々たる力強く、美しいフィナ
ーレが出来上がる事を期待する。
(泉頭)

七月二十四(木)二日目

前日とは打って變つて快晴――
と言いたいところだが、雲量から
言って快晴とは言えない。

凡は昨日のなごりをとどめてい
る。しかし我々は今日から本当の
合宿に入ったのだ。午前中に体を
慣らしてから、多くの先輩の指導
によつてそれぞれの特技をのばし

とくに特別にかくし芸を荷せら
れた者である。この柳陰会は皆の
ためだから、自分の恥しさは犠牲
にすべきだ。(エンヤ)

皆もなが合宿に入りきつていな
い。遊び気分を合宿に見出すのも

よわい所を攻めた。午後には、二
ユーのネジド、ボール等が使われ、
皆はりきつていたが、中三小沢氏
の言葉をかりて言えば、「高校生
は最初はファイトが有るが後はシ
ヨボイな」これはスイカを食う前
である。おやつのあとフオワード
、バックに分かれ、それぞれ練習
をつむ。夜の遊び時間であるが、
司会者の不憤のために少し座が白
けてつまらなかつた、司会者も一
言言わせてもらえば、「積極的な協
力」を求める。

高校生活の一つの思い出となるかも知れぬが、これに終始しては、大いなる成果を望むことは無理かもしれない。

といつても別にむずかしく考えることはない。たゞ各自の「ベスト」を發揮できれば、合宿という名によつてすべてが解消されるだろう。

こゝに言う「」とは、一語につきる。
即ち、F—GHT、（佐野光雄）

は永島さんによつてトラッフの猛攻撃された。ラスト10がラスト50に組になつて、呼ばれた人は返事せらず、組になつてゐる人が返

いなーと思つた。後で加藤さんがしほられるかもしれないが、がんばろう。

午後はやはりフオワードは三田さんがあがめてしまった。

おやつはボストンから来たスイカ四つを食べた。一人一個の六分君は返事をすると、田畠君の名前を言ふので、みんな大笑いした。石原君は田畠君と組んだが、石原君は

返事をすると、田畠君の名前を言ふので、たいへん面白かった。

（大前記）

今日からタラソド練習が始つた。

午前中は高校々舎裏のタラソドでの一の割合なので、皆腹一杯になれる。午後も曇り涼しく、練習はそ

体操をやり、それから大運動場へ行き、先輩一人に五六人の割合で個指導が行われた。バックは佐野さんとトクさん。フォワードは永島さんと三田さん。管っちゃん、オイさん、山井さん、僕の四人

は永島さんによつてトラッフの猛烈な攻撃された。ラスト10がラスト50に組になつて、呼ばれた人は返事せらず、組になつてゐる人が返

いなーと思つた。後で加藤さんがしほられるかもしれないが、がんばろう。

（朝）朝食をくう前から、激しく雨が降つていたので、これはやめらる。しめたと思っていたが、練習を始める前になるとやんでしまつた。掃除の時、篠さんがふとん

七月二二五日（金）三日目

むしにされた。薄田を何枚も重ねられ、息もたえだえになりそうに出て来た。その光景は写真にとつてあるから、後でよく見てもらいたい。練習はきのうとあまり変わったことはやうなかつた。(中止)

(夜) 夕食後は、例の通り集つてゲームをする。最初は関連のあるものの組み合わせで、「隼さん」と「お宮」、「殿下」と「有楽町」など傑作があつた。この時、岩田さんがあらわれ、にわかに活気づく。

(註) この句のできる寸前、岩田さんが手ぶらであらわれた。
岩田さん、かわすとびこむあらわれる

(夜) 夕食後は、例の通り集つてゲームをする。最初は関連のあるものの組み合わせで、「隼さん」と「お宮」、「殿下」と「有楽町」など傑作があつた。この時、岩田さんがあらわれ、にわかに活気づく。

(註) この句のできる寸前、岩田さんが手ぶらであらわれた。

(短文)

ロ練習中、フランスのニューヨークで校長がトマトを食つた。○あした、風呂場で、今のキャリアンが「お宮」と会つた。

にして、それらを他のものと混ぜて、つなぎ合わせるあそび、同じく①いつ、②どこで、③誰が、④殺された。(サエキ)

(脇) 天気は相変らず思わしくないが、練習には好都合、予定通りランニング、サイドキックをやつた後、バックス、フォワードに分かれる。バックはピンチキックをやつたが相当つらかった。

泉頭、石原、佐野さんの球は、右に左によろしく飛んでくる。佐野さんから、いちいちごくろうさんと言われる、大変ていねいだ。最後にスライディングが佐野さんから教えられる。皆んな、納得がいかないらしく、までついていた。

お、前のあそびで、傑作な俳句、

七月二十六日(土)四回目

キック、ワントラップ、ラウンドキックなども、バックスとファワーと別れてやる。

中三も篠さんにしほられているが、僕達も佐野さんと石原さんのシユートするのをクリアノするのを、バックスがやり、ピンチキックをファウードやつていた。

バックスは、このショートするボールを蹴かえずのだが、ボールが早いうえに、ヘテインタすれば頭が痛いし惨々たるものだつた。しかし、あと四回で合宿練習も終りだ。頑張ろう。（ウサミ）

（毎）今日高三の民雄さんと生駒さんの二人が練習に参加した。練習はいつもの様に、サイド、トラップをし、ホワード、バックスに分かれて、スローインをおこない。

次いで一対一をおこなつたが、最初ホワードはバックスにおされたので、くやしまぎれに目的を、ゴールからバックスにぶつける争に交える始末、その後ハーフマッチをおこなつて、OBと現役に分かれ、圧倒的なOBは力を發揮し、2-0で現役を破つた。最後はランニングタをやらず、簡単なちようやくで午後の練習は無事終つた。

（夜）いつもの様に八時からゲームに入る。まず地名、大阪、京都、江戸に限定し、さされた人は、商人、公卿、武士という様にその土地の特色を示して他の人を指ししめすという遊びで、これで大前最後に俳句の問題で、二つの軍に分かれてやり、その「学」を多いに競つたが、「学」のないらしいメジロさんの愚図もでる始末。その「学」がない仕に示そうとして、インチキもあつたが、これも終り十時少し前に就寝となる。

（石原）

はぐずくして、フッキンをやらされた。

七月二十七日(日)五日目

『午前』日曜日なので信者は皆ようり早く起きてミサに出掛けた。練習はいつもの通り、準備体操、ランニング、タッショウ、ターンとやつたあと、これも例の如くサイドになつた。今度の合宿の技術的目標は、このサイドキックであるが、大分上手くなつたとはいえるが、まだまだミスが多い。又練習中ぼんやりして気をぬいている者が居るが、もつてのほかだ。サイドの次はワントラップ、トラッピンク。僕は永島さんのタルーラに入つたが、「ここ」ではどんどん強い球が出され、皆こわがつたり、トラップするところを蹴つたりした。

前半、高(2-1-0)中三、後半は0-1-0、最後のランニングはタッショウをいれて二回、合計百五秒の腹筋練習ではこんな強い球をトラップ。出乗る、

する事はないだろうが、強い球をトラップするというファイトと、どり早く起きてミサに出掛けた。練習はいつもの通り、準備体操、ランニング、タッショウ、ターンとやつたあと、これも例の如くサイド

へ来るといふ技術は是非必要だ。後、ドリブル、バスに移る。バスはまあまあとして、ドリブルは全然出来てない。練習中いつも球に触わり、はやくうまくなる体、心掛けたい。

シュー・テインングをやつた後、中三とハーフマッチを行つた。前半、高校ベストメンバーで行つたが、あまり自由なパスが見られなかつた。合宿の成果をすぐ求めようとするのは無理かもしれないが、これも皆の心もち次第で、その効果を表すことも

例の通り二時半に部室へ行き練習の用意をして、トランンドヘでかけた。僕はどうにも暑いので、ユーカリの日陰でねっこて蹴りっこをしていた。三時ちよつぎり練習開始、カシヨウと将基板は五・六秒おくれたが、うまくごまかした。例の通り体操、ランニングターンをやってから、ベックはデバラさん、浅

する事はないだろうが、強い球を

トランブルするといふ技術と、ど

ういう技術は是非必要だ。後、

ドリブル、バスに移る。バスはまあまあとして、ドリブルは全然出来てない。練習中いつも球に触わり、

はやくうまくなる体、心掛けたい。

日目でみな疲れすぎたと見え

て、何かぼんやりした顔をしてい

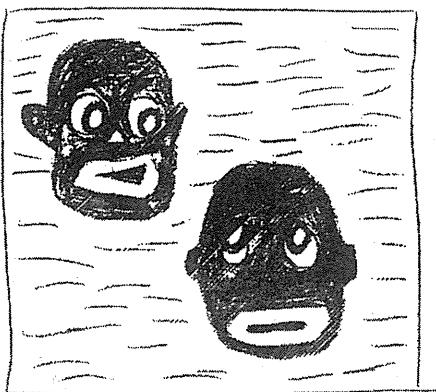
る。

羽さん、デンカに新しく動きをな
らつた。しかし、この動きも今までの試合で多少はやつたものだつ
た。その後でコンビをやり、バツ
クをやり、バツクは〇Bのフォワ
ードに大分まいいらされた。最後に
いつもの通りランニンタを三回や
つて、今日の練習も無事に終つた
。

りなので、やじつたら、反対に高
いの事をやじつたかやえ歌を用意
していく、それをやられてしまつ
た。次に卒業生、トクさん、永島
さん、メジロさん、岩田さん、テ
ベラさん四人が、国電の中でのあ
る出来事を面白おかしくやつた。
その中で特に岩田さんがナインス演
技であった。そのうち、歌を歌い
だしたのであるが、他の部がねて
しまつたので、愛眼防寒になるか
ら、外でやる事にした。そこでだ
いぶ歌をうたつて、最後の夜を樂
しんだ。

きにそれが見られる。皆相當に疲れているのだ。サイドの時にも、タツシュして取るのは、少ない。万事こんなぐあいで、あまりパツとしないうちに、終つてしまつた。

昼食後、二階と部室の掃除。非常によござれたので、時間がかかるつた。掃途の後、反省会をして合宿の幕をとじた。



七月二十八日(月)六日目

女子羽田院大学蹴球部に入つて

六期生 石原 薫

先ず初めに自己紹介をする。僕は昭和三十三年に学習院大学政経学部政治学科に入學し、同時に同大学の蹴球部に入部したものである。以前には栄光学園の蹴球部にいたこともある。

さて入部してからまだ五ヶ月足らずだが、これまでに分つた学習院の蹴球部の桜子を書いてみようと思う。君達のうちで、こういう部なら入つても良いと思つた人はどしどし入つて来てほしい。

僕は入学式のずっと前から、今後もサッカーを続けようと思っていた。一つのは学習院はまだ三部のチームだと聞いた

からだ。入学式の日には、各部、同好会（まだ部にはなれない団体）等が机を外に出して、部員の勧誘をしていた。部が三十余りに同好会が四十五もあるので驚いた。そこで蹴球部の店へ入学式の時この出張を店と呼ぶへ行つてみると、部と旗が置いてあつていろんな顔の人があり、六人たむろしていた。机の前に大きな紙がさがつていて、人の名前が書いてあり、「これらの方々は出頭して下さい」と書かれていた。そこで紙を見ると、なつかしき栄光学園となつかしき石原薰と名があった。こいつは話が簡単だと思

つて早速出頭した。キヤフ・テンにその場の人達を紹介され、練習日程も聞かされた。「練習は午後三時から。毎日。やつてくれますか。」「はあ、やらせていただきます。」「そうですか。うちは他の学校とちがつて上下のへだたりはないですから、楽な気持でやって下さい。」キヤフ・テンは四年生だ。他の四年生に案内されて部室に見にいった。サッカーのグラウンドとの間に、建物一つとラグビーとアメ、フットのグラウンド一つをへだてたところにある、建物に向つて行く。この建物は中二階の高さで外から二階へ行く階段があり、一階は地面の高さに窓があり、壁は下半分がレンガである。願書等で学校へ来た時、此の建物に気がついてはいたが、こんな建物なので馬小舍じゃないかと思つていた。もちろん遠くから見ての話しだる。案内の四年生について中へ入つて行くと、五、六段階段があつ

てまんなかを廊下がつらぬき、両側に五つづつ戸口があつた。右側の奥から二番目の部室が蹴球部の部室だった。栄光の部室の半分程度の広さで、窓が一つ、玄ふにはおおぶまいがきたない。と玄ふにはカラウンドの土が飛んでくるからだ。学習院は日広砂漠とも呼ばれるそうだ。翌日から練習に出た。夏から殆んどやつていないので全然あたらぬ。あわてることはないのでんびりやつていたら、二週間程で調子が出た。しかし上級生の体力には驚いた。とにかく一日も休まずに練習に出て四大学（成蹊、成城、武藏、学習院）・新人戦・甲南大学定期戦・千葉大・勵業銀行等の試合にもじゆやじゆでいた。前のD A C Hに佐野さんが書いたように、色々ときたない事をする。（学習院はそうでもない。）

夏休みは八月の終りの八日向福島の岳温泉で合宿をやつた。前半の四日程雨だ



つたが、ボールアレーよりもランニングをたっぷりやらされた。バスで半道三十分の所をインターバルで往復させられ朝めしの前に坂道でインターバルをやつた。又、この合宿でインナーをやらされ面喰らつた。秋のリーグ戦もレフトインナーをやる。

此の辺で部員同志の面を考えると二部は早く言えば栄光蹴球部の延長みたいなものだ。上下のへだたりは全くない。しかし栄光とちがつて、下級生は上級生に対して敬語を使つ。親しき中にも礼儀あり。えへん。(練習や試合の帰りにはよく自分で食べに行く。そんなところも同じだ。ただラーメンがすしだつたり、今川焼がやきとりだつたりする。又先輩はもちろんだが上級生は下級生に二回に一回の割りでおごる。僕は一年だから樂くなもんだ。「ビール飲みませんか。」新宿あたりでよくやる。話は前後するが、

このように上級生はとても親切だから、どこの大学でも入つてから、入ろうと思う部があつたら、入学と同時に入るとよい。何も知らない僕達に何でも教えてくれる。点の取り易い教授や、出席を取る月頃にそれをやる、という事まで教えてくれる。僕達は現在三部だが、部の創立以来向もないでこれから伸びればよいと思っている。僕としてもこの四年間の内にと固く誓つている。二部になつて、上層の諸君とやれたらどんなに楽しいだろう。そこで前にも云つたように、君達がどんどん入つて来てくれると良いのだが。幸い品行方正な僕のおかげで、栄光に対する信用は非常に厚いし、部員一同君達を期待しているのである。

なんだかまとまりのない文章になつてしまつたが、今後の栄光学園蹴球部の活躍を祈つて、ここに筆を置く。一終一

親善試合

対日立戸塚戦 —菅沢俊典—

全栄光対上智 —田畠哲也—

対日立戸塚戦（於日立グ）

八月十八日

栄光 1
0 — 1
1 日立戸塚

この日は、夏休み練習の第三日目で、皆大分疲労の色が見えていたが、相手チームが東葉園とあって軽い気分であった。グラウンドからかなり離れた日立の特別な家で着替え、四時少し前にグラウンドに着いたが、驚いた事にはグラウンド中に小石がゴロゴロ、ゴール前は凸凹、ゴール内は草がボウ／＼それでもようやく試合前の練習を終えた頃、サイレンが鳴り響いて日立の人達が工場から出て来た。ようやく日立全員がグラウンドにそろつたのが四時四十五分すぎです。

ぐに試合開始になつた。応援は少なかつたが、それでも中学部員三人、それに地元戸塚の栄光生と内山君のお母さんが来てくれた。キックオフ直後二、三分栄光押し続けたが、ボールはゴールを高々と越えて出てしまった。そのチャансも過ぎて前半五分に今度は敵フォワードにバックの真中を縫パスでぬかれて先取点を許した。その後も敵の大きなキックでおびやかされたが、今日の栄光全くのつきっぱなしで、敵のシュートは、ポストやバーすれ／＼で出てしまつた。しかし栄光も十五分加藤のクリーシュートでタイに持ち込んだものの、フォワードのコンビは乱れがちでなか／＼チャンスが訪れず、そのままハーフ、タイムになつた。後半はペースが非常

に早くついていけるかと心配したが、あまりバテずに試合についていけたようだったが、敵のボレー キックの巧さには驚いた。全タノントラツルでポン／＼パスを出され、ハーフ陣はみだれがちでたびたびピンチを招いたが、今日は全くついていて、球は全部ゴールス レ／＼で一向に入れられなかつた。

特に、ゴール前のヘッティングのせり合いでも、相手に右脇に決められたかに見えたのをバック内山が辛くもかすって出したり全くひやつとする連続であった。フォワー ドも後半コンビが良くなつたがもう一步という所で敵に蹴り返されてしまつた。あとは同じような経過をたどつて終了した。

終つて直ぐ近くにある日立の風呂に行き、特別にたててくれた風呂を送手全員が浴びて裸のまま通りを帰つて来た。そこでモリそばやエネを食べて、腹を満し、日立の人別れを告げて帰つた。

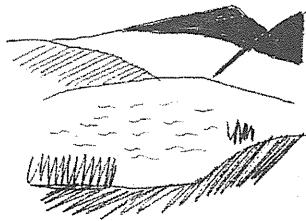
親善試合 対上智

(小石川グ)

全栄光	2	1	1
1	0	1	0
1	1	1	1
2 上智			

ともかく奥に暑く、又親善試合ということもあってか皆極端に動かない。試合中さえもグラウンドに落ちるスタンドの影が人気を呼び、常に二、三名は、その中にひつ込んでいた。そんな暑さの中に試合は進み、中半0-0で終る。後半に入るとやや全栄光軍押し気味となり再三ゴール前にチャансスポールが生れる。特にこの日大活躍の元原さんの敵ゴール前三十センチよりのクリヤリングが三本続き、バックスをうならせた。この後半1-1で終り結局2-2の引き分けに終る。これで昨年に引き続き、上智との対戦成績は一勝一分となる。

二時半キックオフ、前半0-B中 心の栄光軍対上智は1-1で終る。



旨無し(題なし)

高三 奥田斐規

台風二

十一号の

お説向

の御籠表

に今日は

一日休み

。この儲

つた你な

損した你

な休日に

、編集長

佐久間君

は御親切

も僕が退

こうしてその仕事に取りかかった
という訳だ。

「タツシユ」の原稿——これは
多くの場合次の你な会話から始る。
「おい、タツシユに何か書いて
くれないか。何でもいいよ。」
「いやだヨー、書けないよ。」
「誰々がいいぞ、あいつは国語
の点がいいからな。」

そして後は頼む方の腕次第で相
手に首を縊に振らせるかどうかと
いうことになる。ところがこの僕
は前科へ?——が原因してか、途中
のセリフ抜きで引き受けた。否、途中
引受けさせられることになつて
いる。

△ ウエー日 九月一日

この日は一日中汽車の中、
発車前約一時間、汽車に乗り込
んだ。列車は十時四十分(午前)
ソロリソロリと上野を出発、三時
間程すると青木の故郷へ行くとき
の下車駅、黒磯(くろいそ)へ止つ
た。そして僕は今

題に入ることにする。

「本題」こんな言葉を使うと、

いかにも難しい事を話し出す你に

思われるが、この原稿が蹴球部の

部誌に載るものであるということ

だ。ここでいう本題とは高三の修

学旅行に於る蹴球部員の活躍(?)

についてである。以下その旅行の

日を追つて思い出せる限りの事を

述べていく。

た。ところがどうも品のない奴がいるもので

「ナニ、青木の故郷？アア、なるほど『くそい』か！」

多分乱視なのだろう。当の青木は黒磯を過ぎると、幼き頃の夢でも見ているのか、御丁寧にヨタレまで重してオネンネ。

辛い練習、ピーツと笛が鳴つて「少し休もう」こういわれて木蔭へすわったときの気持の良さ、一十数時間モノロノロ列車の堅い席にすわっていて、たまに立ったときの気持の良さ。――

何しろいやでもこの汽車に明日の朝まで乗つていなければならぬのだから……。

眠いのに眠れない時程シャクに障るものはない。ここから日付の上からは明日つまり二日になる。

△第二日 九月二日 時は午前二時、青木はレインコートを着てもう昨日の中に席の下で寝てしまった。そして今金沢も席の下へもぐりこみ残つたのは僕一人、眠いんだがどうしても眠れない。仕方なく後の車両にいつて見ると、タミオ、ガーチャン、クリ、イッパチがチームワーク宣しく座席一まことにうまい具合に寝てゐる。イッパチが目を覚して少し話しかけたが彼も眠そうなので、遠慮して自分の席へもどつた。結果起きているのは僕一人。

人は見かけによらぬものとよくいうがその実例ともいふべき事件を話そう。へもつとも人によつて、見かけ通りだと思わないとは限ら

とトランプを始め将棋、花札等の長期戦が始る。タミオ、ガーチャン、イッパチ、クリの四人も一組になつてトランプを始めた。そしていろ／＼な種目をやつている中に種が尽きてきたのであろう。クリチャン、が三人にナポレオンを教えた。そして三人とも一通りは出来る様になつた。所で賞としてドロップがかかる。すると先ず目の色をかえたのは〇〇〇〇（御想話したが彼も眠そうなので、像にまかせる）、そして悠々とこれをさらつていつたのが向むかっちゃん、今までこてんこてんに負けていたのに食物がかかるとなつちまち勝をさらうとはガーチャンもなかなかやるチャーネエカと感心した次第。これがオデンとか青木ならまだ話はわかるのだが。なしろ甲府で飯九杯の前座をもつて

テ。昨年の合宿でオヤツの争奪勝抜き戦で常勝を誇リ又この六月には二分間に牛乳十本の記録をもつ青木のことだから。

た時にはダッシュするしく既に
ンゴを一口、ガブリとやりながら
から外へ、僕達も驚いたがもつ
驚いたのが店員、将にあいた口ば
ふさがらないというやつ。その

中休屋といふ所で昼食をとりやつとやーの宿十和田ホテルに到着。さてここで一寸した惨事が起つた。

僕の部屋には偶然にもタミオ、
ガーチャン、オテンとB組の4人

「こでついでに今度の旅行中の
食物に肉する記録（？）を上げる
と菖温泉でオテンがドンブリ三杯
。帰りの車で青木が青森から買つ
て手たリンゴ一貢目（少しへつて
はいたがそれでもセ、八百匁はあ
つた）を青木、キンタク、僕、他
一人の四人できれいに平らげた。

にとつてはとんだ災難。
全く生駒
は人を食つた野郎だ。

吉田では精才もよく食つたが、
内で焼そばを食べ、オーテンとスシ
を食い、そして旅館に帰つてきて

はい、ハチがやめて見てトランプを始める。その中に凡呂ヘどうぞというので入りに行こうかなと思つて、いるときオランダが何かたくらんでいる様な顔つきでどこからか、帰つて来た。

又りんごといえば青森市内を見物にいった帰りウマがスツト或一

さて食物の話はこれくらいにして、肉心の汽車は——僕がほと

「オイ、オク、ボート乗らネエ
ーか。タダだぞ！」

軒の果実店に入つたかと思うと、
「二」のリンゴうまいかな。一つ
もらうよ。」店の人はてつきり買
つてくれるものと思うから愛想よ
く、「エー、どうぞ」——といつ

いくら遅いといつても」の汽車
だって前進しているのだ。チヤント。
ト。だから十九時間十六分たつて
この通り古間本という駅に着いた
のだ。二二からバスに揺られて途

最後の言葉がタツト魅力的だ。トランプに熱中している四人を残してオテンとさつそと出かけた。ホテルから湖畔のボートがある所まで三分、あるある余里斯マ

トではないがともかく乗れどうなのが七艘ばかりある。

少しばかり波はあるが気持の良い事この上なし。オテンはドンドンこぎ出して大分遠くまでいつてしまつた。ところが僕のはオールをよく見て未なかつたので穴が大き過ぎ二かきすると一回はずれてしまう。最初は我慢していただがどうにも進まないので一やんもどつてオールをとりかえようと向きを変えた。さて、よかつたのはこれまで、岸に近づくと妙な婆さんが立つてじつとこちらを見ている。余り気持の良いものではない。知らん顔をしてオールを取りかえ再びこぎ出そうとする。「一時間以内七十円だよ、」ホーラ未たどうも話がうま過ぎる思つた。かくして百四十円を奪われたのである。

オテンの経済學から語ると将に勝事(?)——。

夜は笛でエンヤに葉書を書いて就床は十時であつた。

△水三日 九月三日

朝九時過ぎ十和田ホテルを出て湖上遊覧、奥入瀬溪流散歩、夕方鳶温泉に着く。

先づここでホーに話題になつたのは便所である。勿論その用途に變りはない。ところが、その凡流なり、何しろ下には小川へガーチビングはやるバタフライはやる——従つてよく食う——という訳。

(念撮影(?)

二二の温泉は十和田ホテルの夙

呑よりも広く、キンタクやオテンはそのさつそうたる泳ぎ振りを見せていた。(但し広いといつてもクロールで二かき程度)

オテンといえば彼はここで奥に

多く風呂に入った。何しろ何處で何か食つていなければ風呂に入つてゐるという位よく風呂にいた。

そして大人しく入つてゐるのなら良いのだがそこは彼のこと、ダイビングはやるバタフライはやる——従つてよく食う——という訳。

夜はエネ大会があり、東郷、タミオ、ガーチャン、イツパチが委員として大いに活躍した。又その

時やつたゲームはほとんど蹴球部の送別会番でやつたものであつたがそれに出場した部員の活躍振りを書いて見ると、

まず青木はローンをかけずゲー

ムで持前の要領の良さを發揮見事

一位となる。

次に要領はよく心得ていいるはずのクリチヤンがビスケットを食べ、た後で笛をならす競技に出たが惜しくも優勝を逃した。

又部長東郷先生はメリケン粉の中のアメを口だけで探し出す競技に出場メガネをとつて顔中真白にして奪斗された結果、堂々と第4位（注、出場者数四名）を獲得された。

かくして愉快な工芸大会は十時頃まで続けられたが、この時親愛なる下期生諸君へのお土産も收集されたのである。

尚、この蹴球部の余興として、例の「遭難する飛行機」をやったが余り成功とはいえないがつた。

△九月四日 九月四日

高温泉からバス青森まで。

途中酸ヶ湯で例の鹿内という爺さんに案内されて少し山を歩く。青大将を捕え皮をはいで肝と称する部分をペロリと食べたというのはこの時のことである。この若い爺さん鹿内さんはこんなものばかり食べているから元気なのだそ

うだ。

ほんの二、三枚書くつもりでいたのにいつのまにかくだらぬことをだら／＼とこんなに長く書いてしまった。最後にまだ一日、九月六日が残っているのだがこの日は別に、ただ朝仙台から鈍行列車に乗り夕方無事上野に着いたというだけで車中大したことなかつたから省略する。

△九月五日 九月五日

朝六時半に仙台へ着きバスで市内遊覧、お墓参りなどさせられ、塙釜から船で松島を見物、再びバスで最後の宿作並温泉へ向う。

作並は割に待遇もよく、部屋は

僕とガーチヤンが藤の間とか、そして隣にオデーンとタミオがいる。

夕食後、オデーン、タミオ、クリ、イッパチがやって来て六人でトンヌをやる。ガーチヤンの貢つて禾たりンゴをスッパイ、まずいといつて食べながら。なかなか愉快な夜だった。

病氣の恐しさ

八期生 佐久間 巖

去年の十月の頃だったが、高一と高二の会で、泉頭さんへ彼も瘤席していたから次の称な事を聞いた。「中二のやつの中には、風邪で熱があるのにやつていくぐらいい蹴球に熱心なのがいるのだぞ。」この言葉を聞いた時、僕は直ぐに泉頭さんに言つた。「それはまちがいだ。体こそ大切にしなければいけない。」と。

それは去年の二月の初め、雪の日に試合が行なわれた時だった。前からの連絡不十分な為、集まつたのは十人、しかも半分は中二へ現高一）だ。「れではいくらなん

でもひどかった。試合は苦戦であった。しかも、延長戦二十分は苦しかった。〇一〇で抽戦勝を得たのは苦心のたま物だった。

これから、僕はどうも健康にすれなかつた。初めは凡邪ぐらいだろうと思つていたが、どうもこたえられなくなつた。それより一週間休んだ。愈を入れて一日よけいに休んで学校へ行つた。しかし「じれた凡邪はおそろしい。高い熱が出た。中耳えんになつた。又鼻血は日を追つて出る様になり、

手のほどこし桺もなかつた。熱が引き、耳も大分良くなつたが、鼻血はいぜん出た。勿論鼻から出るのだから、知れたものではある。が十日も寝てゐる者にとつては、まさに精神的に非常にこたえた。鼻が出てもかめない。鼻がつましきない。そんな事をすれば、両側からドシと出て来る。しまいには何もしないのに一更静に寝てゐるのに一自然に出て来る。事ここに致つては如何ともし称がなかつた。暗黒の日々が続いた。

しかしこれは、病氣の山であつた。次第になおつていつたが、勉強しようと思つても、頭に血がのぼると自然に鼻血が出て来る。勉強などはできない。こんな状態であつたから、三学期いっぱい休ん

だ。春休みの頃は大分良くなつた

わからぬだらう。しかし中一か

自分の体が悲しくなつた。

が、鼻血は油断もすきもゆるせな

ら続けて乗た蹴球は、簡単に振り

い。

やがて高一になつたが、精神的に病気に対する恐怖感が身にしみ、いわばノイローゼになつた。夏休みは、体に全然自信がもてず、ちよつと頭が痛くなるとすぐ寝込んでしまつた。夏の合宿、丹沢の

キャンプで、体は劇に自信がついた。学校が初まる頃は、もう皆と同じに練習できるなと思った。しかし病気の余波はまだ自分にひどい。一つにはファイトが無くなつた事であり、又もう一つには、自分の体に信頼が持てないので練習ができなかつた事で、その結果自分が蹴球から離れていつた事であつた。

皆は僕の文をよんで、なんとかこそ一番つらい時だ。今しんぼうしなければ、蹴球を楽しむ事はもうできない。つらいがもう少しのしんぼうだ。幸い事は自分で勝ちぬくのだ。これを解決するのは自分だ。

そう思つて、これより必死になつて戦つた。なるたけ部に積極的にになろうとした。しかしそう思つても、スレーキをかけるものは体

死にそうになつてから、つくづくと病気の忍しさを知り、それからは何事も健康に注意するようになつた。

僕の言いたい事はこんな事だ。なつてからではしかたがない。蹴球部員は皆元氣であるが、二度と僕の様な事を繰り返してもらわなければ、こんな愚文を書いた次

て弱い体なんだらう。つくづくと

こんな気持は退屈した者にしか出席するとエンコした。中学の試合を見にいつた日、夜ちよつとお

六期生送別会

於 講堂二階合併教室

3月 28日(金)

今日は高三の送別会である。この会の前に現役と去り行く高三との試合があった。この日はとても寒く、タラソードのすみの穴の中で火を燃して寒さをしのいだ?。時に高一の佐伯君はこの寒さをものともせず、この穴に鉄の棒で穴を開ける事を決心し、トテンカーテンと始ました。トクサン日く。「このファイトは買うよ。」この一言で佐伯君大いに奮起し、ガンバッて遂にコンクリートの壁をつき破ってしまった。うそだと思われる方は、まあ見に行つて下さい。

尚、高三の送別会と併行して、他校へ中学を終え、転校する事になつた吉田、林両君の送別会も行つた。

(結果) 中三4-10中二
卒業生3-13送別軍

午後からは演芸会だ。しかし前から決められていた一学年一つやるという事は、何處も出来ている訳ではなく、我々高一卒(未だ高ニではない)も取り急いで考える。例会の群に続いて、中三の寸劇「レストラン」。お客様が入つてくると並んでいるボーイが順々に言い伝えるが、どれも品切れでお客は怒つて、主人の大前君に水をぶっかけるというもの。

次は中二の傑作「口陶仁王枕」である。主役唯野君の欠席で富野君が仁王枕になる。口を開けたところは仲々うまい。(自然のままである)そこへ入つて来る町田君、「中風」の林君もこれ又ケツサク。なまぐさ坊主の小沢君は頭がイガタリで適役といつたところだつた。

どの学年も中二ぐらゐの投力は必要だつたる。

永島さんは今日も心臓な話をす。君達は東京へ行つたと、安くうまい「十円ズシ」を食べると

言う。以下は彼氏の悪行談である

卒業生から六年间をふり返つての言葉が述べられた。

「奥社会に役立つ人間になる為に部生活は役立つた。」

「部で培われた友情は貴重な財産」

「重大なのは結果でなくして、そこに至る努力である。」

そして最後に、卒業生得意の盆踊り「月が出た出た」を卒業生以

良さに圧倒された。
『いくらだい。』
『ハイ、二百円』

なんてぐあいに食べもしない分まで取られてしまう。だからし返しとばかり、四、五人でいって、さんざん食べて、反対に三十数個食べて、十個も値段をさし引いてくる」と話す。『褐色の心臓』である。

今日は全くの快晴にめぐまれた。ところが十時に集まるはずのものがいつまでたつても人が集まらない。特に主力を中三、高一にいたの

む湘南、横須賀はそれ専多くの欠席の為に、互に補強し合つた。そ

の為思わぬ災難をうけたものが横浜である。補強した横須賀、湘南は、どつちが主力なのかわからな

い程のチームになつて、廿つかく下多くの者が踊り、「ほたるの光」を歌つて、二の楽しい一日を過ごした。

去年のビリの汚名をすてんとする横浜を破つた。その結果、横浜は

今年も最下位となつてしまつた。

第二回 都市対抗

湘 南	3-1	横 浜
横須賀	3-1	湘 南
4-1-2		横 浜

昨年新しくつくられた都市対抗の決戦が九月二十一日(日)に行なわれた。

演芸も終り永島さんの話のあと

昭和 32 ~ 33 年成績表

= 中 学 校 = = 高 校 =

母 学 教

年 月 日 相 手 挑 試 合 名 得 奪 失 点 勝 負

試合數26

續得矣69 繼失矣20 19勝6敗1分

4シーズン連続県下 2位

高 等 学 校

年 月 日 相 手 校 試 合 名 得 失 各 勝 頁

試合数 38

總得失90 總失誤56 21勝12負5分

33年11、インターハイ、県予選二年連続優勝
12、西関東予選 対龍崎に涙をのす



編

集

○ダッシュの発行がおそくなつて
すみません。こちらのタイマンと
ネタが少なかつたのでおそくなつ
てしまつた。ゴメンナサイ。

KIの部員中でも特に可愛いい

○口氏、図書室内もだいぶ暗らく
なつたので螢光燈をつけようと立
つた。うしろでドンドンという音
がするのでふりかえると、「とど
かねエヤ」といつて盛んにひもに
飛びついていた。

又同じKIのメム氏、図書室に
ひとけの少ないのを見はからつて
机の上にごろり。みつかつたら「
めっ」だとひやひやしている。
とたんに「ドタドタ」と廊下の方で音
がしたら、たちまち飛び上つてしま
つすぐ立つてしまつた。

「ダッシュ」一九四号一
昭和三十三年十月五日印刷
昭和三十三年十月九日発行

発行所
横浜市金沢区泥亀町一
崇光学園蹴球部
編集者 佐久間

印 刷 所
横浜市金沢区泥亀町一
有 有
T E L (7) 九七四三番
巖

— 非 売 品 —

編集長 佐久間
編集員 内山正樹
菅 沢 俊 典